

4 人権教育

共生社会の形成に向けた人権教育の実践

—附属特別支援学校との連携を通して—

原田 雅史

本論の要旨

中学校学習指導要領解説(道徳編)に、中学生の発達段階では「社会の在り方について目を向け始め、現実の社会が持つ矛盾や課題に気づき、理想を求める気持ちや正義感も強くなっていく」とある。生徒自身がこれまでに養ってきた人権感覚をさらに研ぎ澄ませて質を高めていくには大変重要な時期であり、このような実態から「障害について理解を深める教育」は必須であると考え、本年度の人権学習は「障害者理解」をテーマに進めていくことにした。

本校生徒の実態や今日的課題を踏まえると、人権学習のカリキュラムや特別支援教育に日々携わる専門家からの思いや考え方に触れる時間を設定することによって、生徒の人権感覚や人権意識が一層育まれるきっかけとなるのではないだろうか、と考えた。附属特別支援学校および滋賀県ポッチャ協会と連携しながらカリキュラム等を構築し実践に至った。

キーワード 人権、共生社会、障害者理解、特別支援教育

1. 研究主題によせて

(1) はじめに

平成25年(2013年)6月、国連の「障害者の権利に関する条約」の締結に向けた国内法制度の整備の一環として、「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」(以下、障害者差別解消法)が制定された。今後も障害を理由とする差別の解消を推進し、全ての国民が障害の有無によって分け隔てられることなく、相互に人格と個性を尊重し合いながら共生する社会の実現を目指すことは言うまでもない。

学校教育においてもその例外ではなく、障害の有無に関わらず全ての生徒が授業内容を理解し、学習活動に参加している実感・達成感を持ちながら、充実した時間を過ごしつつ、生きる力を身につけていけるかどうかは最も本質的な課題であるにとらえた。

(2) 研究のねらい

本附属校園は幼稚園・小学校・中学校・特別支援学校で構成されている。また、本校には特別支援学級が存在しないが、生徒の中には学習上または生活上で著しく困難を示す者が在籍している。こうした現状の中で、共生社会の形成に向けて特別支援学校との連携を強化し特別支援教育の充実を図ることが重要であると考えた。特別支援教育に日々携わる教員や専門家からの思いや考え方に触れることによって、生徒の人権感覚や人権意識が育まれるきっかけとなるのではないだろうか。

また、本校の人権教育の目標としては、「一人一

人の生徒が人権の意義・内容や重要性について理解し、自分の大切さと共に他の人の大切さを認めることができるようになることである。それが様々な場面や状況下での具体的な態度や行動に表れるとともに、人権が尊重される社会づくりに向けた行動につながるようにしていきたい。

(3) 本校の人権教育における今年度の取り組み

本校では、「共生社会の実現に向けて」をテーマとして、学年ごとに以下のような内容を設定し、人としてよりよい生き方を学ぶ機会を設けている。特に本年度は、「障害者理解」をキーワードに特別支援学校との連携を図りながら人権教育の充実を目指した。

人権教育

- ◆第1学年 ちがいのちがい(人権全般)
- ◆第2学年 部落問題～水平社宣言～
- ◆第3学年 部落問題～結婚差別～
- ◆全学年 共に生きる(障害者理解)

多文化理解教育

- ◆第1学年 韓国・朝鮮について知ろう
内容：韓国人講師を招き、韓国の言語・文化などについて学ぶ。
- ◆第2学年 沖縄修学旅行に向けての平和学習
内容：太平洋戦争や沖縄戦について知り、当時沖縄で何が起こっていたのかについて学ぶ。
- ◆第2・3学年 共生社会への参加
内容：総合学習 BIWAKO TIME(以下、BT)において、校外活動先にアポイントを取る。

(3) 人権学習の目標について

1年	差別についての学習(ちがいのちがひ) 様々な国の文化・生活習慣などを知った上で、認めても良いちがひと認めてはいけない差別(国籍・出生地・性別・文化・宗教などによる)について自らの考えを深める。
2年	部落問題学習(水平社宣言) 全国水平社創立の際、差別と闘ってきた人々の思いに触れ、基本的人権の重要性を知り、あらゆる差別をなくすための判断ができる態度を養う。
3年	部落問題学習(結婚差別) 結婚差別と立ち向かう人々に関する資料を読み、自らの心に潜む差別意識と向き合い、差別を許さない態度を養う。
全学年	障害者理解学習(共に生きる) 共生社会の形成に向けて、社会が持つ矛盾や課題に気づき、生徒自らができることを考え、理想を求める実践的な態度を養う。

2. 特別支援学校との連携を意識した人権学習のカリキュラム構成の工夫

(1) 題材名, 対象学年, 授業時間

障害者理解～共生社会の実現を目指して～

第1・2・3学年 全3時間

(2) 学習目標

障害者に対する差別をなくし、障害のある人と共に豊かな生活ができる社会をつくるために、自らにできることを考え、行動できる態度を養う。

(3) 学習計画

第1次: わたし いややねん … 1時間

第2次: 人権講演会「共に生きる」… 2時間

3. 実践事例1

(1) 主題「共に生きる」

内容項目 2-(2) 人間愛・思いやり

関連項目 4-(2) よりよい社会の実現

資料: わたし いややねん¹⁾

(2) 主題によせて

特別支援学級が存在しない本校の生徒の実態として、身近に感じられないものや関わりのないもの、異質なものに対しては特に忌避意識が大きい傾向が見られる。一方で、学級内の人間関係を見ていると、学習・生活上で困難を示す生徒に対する心ない言動や行動を目にすることがしばしば見られる。

本時では、絵本「わたし いややねん」を教材として取り扱う。著者には幼いころに患った脳性麻痺のため手足に障害があり、絵本には著者の心のつぶ

やきや叫びが綴られている。外出時、周りの心ない反応に心を閉ざしていく著者だが、心の痛みを乗り越えて再び社会に出て行こうとする。その最後のページは「そやけどなんでわたしが強くならなあかんねんやろーか」という自問で終わる。資料を通して、障害のある人を苦しめているのは、自分たちを含めた周囲の健常者の意識であることに気づかせたい。

(3) 本時の目標

人は障害の有無に関わらず一人一人が大切にされる存在であることを理解し、資料を通して、障害者を苦しめているのは自分たちを含めた周りの人の意識であることに気づくことができる。

(4) 評価の観点

障害の有無に関わらず、平等な視点に立ち自他の違いについて理解しようとする態度を持てたか。

(5) 学習展開(学習内容・学習活動のみ抜粋)

学習活動
人権週間 12/4～10(人権の日 12/10)について知る。 絵本「わたし いややねん」の範読を聞く。 著者について知る。 「わたし でかけるのん いややねん」に込められた著者の思いについて考える。
なぜ「わたし」は外出することが嫌だったのだと思いますか？
本文「そやけど なんで わたしが 強ならなあかんねんやろーか」「何故私たち障害者だけが、声を大にして問題提起しなければならないのだろうか？」を読み、著者の思いについて考える。
「そやけど なんで わたしが 強ならなあかんねんやろーか」という言葉には著者のどんな思いが込められていると思いますか？
本時の振り返りを行う。各自自治体が提唱している「配慮を求めるマーク」について知る。
次回の講演会について説明を聞く。

(6) 授業実践の様子

生徒の感想より（一部抜粋）

- ・僕は京阪電車に乗って登下校していますが、たまに附属特別支援学校に行く方向を見ることがあります。同じ人間であっても、差別する気持ちが健常者に出ているのかもしれないと思いました。僕自身も今日感じたことをもとに考えを改め直さないといけないなと感じました。
- ・しないように心がけていても、障害者のことを自分たちとは違うと見ていたなと感じた。電車やショッピングセンターでも自分とは違うように考えていたことがあったと思った。
- ・社会的弱者に向けられるべきは同情や哀れみではなく、理解とちょっとした手助けなのでは？

4. 実践事例 2

(1) 主題

人権講演会「共に生きる」

講師 滋賀大学教育学部附属特別支援学校

副校長 井上 照美氏

滋賀県ポッチャ協会

事務局長 田中 康隆氏

(2) 主題によせて

人は様々な悩みや弱さを持っているが、互いに支え合い、助け合う中でそれらを乗り越え、たくましく生きることができる。本次では、滋賀大学教育学部附属特別支援学校・滋賀県ポッチャ協会より講師を招き、それぞれの立場から考える共生社会への思いに生徒は触れることになる。

この講演会を通して、障害者のために学ぶのではなく、人として共に生きていくために学ぶことを生徒に伝えていきたい。また、障害者へ施しを与えることではなく、「真の思いやり」とはどのようなものなのかについて深く考えさせたい。平等な視点に立ち、共生社会の形成に向けての考えを深めることができた時、障害者に対する差別意識も払拭されるだろう。

(3) 本時の目標

人権についての基本的な考え方を理解し、人権に関わる様々な問題を主体的に解決し、共生社会に向けて実践していこうとする態度を身につける。

(4) 評価の観点

共生社会の実現に向け、積極的な生き方を模索しようとする態度が見られたか。

(5) 学習展開（学習内容・学習活動のみ抜粋）

学習活動

1. 人権学習に取り組む意義について聞く。
2. さまざまな障害について知る。
3. 障害者が日常生活の中でどのようなことに困っているか考える。
4. ボッチャについて知る。
5. ボッチャのルールに込められた、誰もがスポーツを楽しむための工夫について知る。
6. 実際にボッチャを体験する。
7. 共生社会の実現に向けて、講演会を通して自分自身が感じたことをワークシートに記入する。

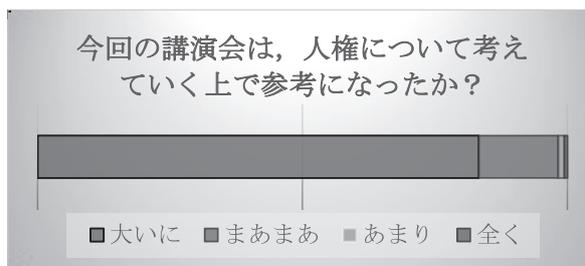
(6) 実践の様子および考察

講演会は全9学級（出席生徒346名）を対象とし、講師と生徒との関わりを大切に、問いかけや実演を取り入れながら参加型の講演会を目指した。

① 人権学習は何のためにするのか？

講演会の冒頭に、生徒には人権学習がなぜ必要かを問うと、生徒は自信なさげな様子を見せていた。人権学習というと、生徒はおっくうになり、興味・関心が低下する傾向がしばしば見られる。

これまでも発達段階に応じて人権学習に取り組んできたが、改めて人権学習の存在意義を確認する良い機会となったようであった。人権学習は「自分に人を排除・差別する心がないか問うため」、「自分の幸せを守るため」に取り組むことを丁寧に指導することで、障害のある人のために学ぶのではなく、一人の人間として幸せに生きていくために学ぶ姿勢を養うことができると考えた。生徒には授業後の振り返り質問紙調査を配布し、「人権を考える上で参考になった」について質問した。その結果をまとめ、**グラフ1**に示す。質問紙調査は、実施した。4段階評価（肯定を4、否定を1）とし、評価の数値は平均値を示した。



大いに：288名、まあまあ：52名、
あまり：4名、全く：2名

グラフ1 人権学習講演会 事後質問紙結果

この調査から読み取れることは、全体の98%の生徒が「参考になった」と回答しており、今回の人権学習講演会が多くの生徒にとって人権について考えていく上で有意義であったことが伺える。また、この機会から興味・関心が促され、主体的に講演会に参加する生徒が増加したと推察される。

②想像力をはたらかせて

講演会の展開部分では、講師がいくつかの具体例を提示し、障害者が日常生活の中でどのようなことに困っているか考察させる場面を設定した。多くの生徒が挙手し、主体的に学ぼうとする姿が見られた(図1)。

立場の違う者同士が、互いの生きにくさ(特に少数側)に理解を示し、誰にとっても生きやすい社会を作り上げていくことが大切であるということを確認し、そのために必要なことを生徒自身に考えさせることは、大変効果的であったように思う。

また講演では、障害は個人にのみ属するものではなく、周囲の人々や社会との関係の中に存在するものであり、個人としてできることは「想像力をはたらかせて」をキーワードに、アイデアや工夫を暮らしの中で展開することの重要性を説いた。



図1 講演会展開部分の様子

③ボッチャ²⁾との出会い

ボッチャ(Boccia)とは、ヨーロッパで生まれた重度脳性麻痺者もしくは同程度の四肢重度機能障がい者のために考案されたスポーツである。目標球に、赤・青のそれぞれ6球ずつのボールを投げたり、転がしたり、他のボールに当てたりして、いかに近づけるかを競い合う。障害の程度によりボールを投げることができなくても、勾配具(ランプ)を用いて、自分の意思を介助者に伝えることができれば参加できるため、誰もが楽しめるルール工夫についての具体例として講演会にも取り挙げた。(図2)

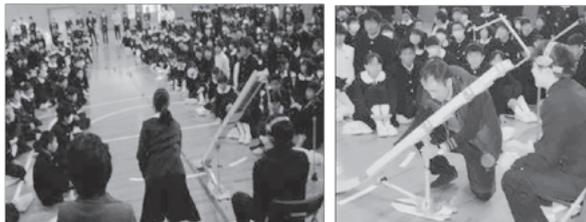


図2 ボッチャ実演の様子

④講演会後の感想より

- 人権学習は「自分に問うため」「自分の幸せを守るため」と講演会中にお話があった。あまり思ったことがなかったけど、お話を聞いているうちに、確かに自分に人を差別する心がないかを問うためにも取り組んでいるんだと思い、人権学習に対する考え方が少し変わりました。
- 実際に障害児者と関わっている方のお話だったので、言葉に説得力があり、勉強になることが多かったです。障害一つ一つにたくさん問題があることを知り、その解決策を見つけていくことが大切で、ぼくたちも相手の気持ちになって、一緒に考えることが必要だと思いました。また、自分は電車通学をしているので、ケガをしている人やお年寄りに対しても心がけたいと思いました。
- 自分たちが思っているよりもたくさんの助けが必要なんだと感ずることができた。この時間を通して、自分も困っている人があれば積極的に助けてあげることが自分にできることだと思ったので、いち早く周りの変化に気づけるようにしていけたらなと思った。

5. 研究の成果と課題

生徒の感想からも読み取れるように、本研究の中で生徒は生活の中の道徳的な疑問を解決しようと考えているように思う。今回、特別支援学校との連携を意識した人権学習のカリキュラムを構成することで学級担任や講師の思いと、生徒自身が主体的・対話的に学ぶ活動の中で、人権への学びは深まったのではないだろうか。また、生徒はさまざまな立場の人との交流の中で日常生活に散りばめられた道徳的な疑問を解決しようとしており、さまざまな立場の人との交流を望んでいることが再確認できた。我々はそのことを踏まえ、来年度以降の共生社会に向けた人権学習についてさらに検討を重ねていかなければならない。

■引用

- 1) 吉村敬子 わたし いややねん, 偕成社, 1980
- 2) 一般社団法人日本ボッチャ協会ホームページ <http://www.japan-boccia.net> より、ボッチャのルール概要を引用した。